

鎌倉初の女医 腰越医院・沖本幸子

(1872~1923)



幸子と母富

明治の女性が専門的な職業を身につけるには、女子師範を出て教師になるか、医師になるしかなかった。しかし女性が医師になるのは困難であった。

1884(M17)年 女性の医師が認められたが、学びの場である済生学舎（医学専門学校）も同年やっと女子の入学を認めた。

幸子は14歳で高知から上京し明治女学校で学んだ。早くから女性の自立を考えていたので、医師を目指し明治女学校から済生学舎に進んだ。1900(M33)年 医術開業試験に合格し、東京大学医学部小児科で臨床学を研鑽した。医籍登録をした女医の百番までに入っていた。

幸子の妹くまは、現・鎌倉児童ホーム（鎌倉市役所西側）の前身「鎌倉小児保育園」の創設者佐竹音次郎の妻である。音次郎は1894(M27)年腰越で医院を開業した。その後1906(M39)年、保育事業に専念するため鎌倉への移転に際し、義姉幸子に腰越医院を委ねた。幸子は地域の医師として、また音次郎の地



新築の腰越医院の前で 幸子は前列右より8人目

域奉仕の意志を継ぎ、1916(T5)年には病院を新築した。その時の横浜貿易新報には「女医として成功せしは県下の嚆矢なり」と記されている。

腰越村の名士として

1908(M41)年、鎌倉医師会のコッホ博士の歓迎記念写真に、男性の中で女性一人、羽織はかま姿の幸子の写真が残っている。『万朝報』の創立10周年記念号の腰越保育園探訪記には「・・・丈高く、色白く、目涼しく、服装、態度、頗る気品の



コッホ博士を迎えて（於・鎌倉海浜ホテル） 2列目左端沖本幸子

高いところあると同時に、言語、応対、又頗る快活なところがある・・・」と幸子の様子が記されている。

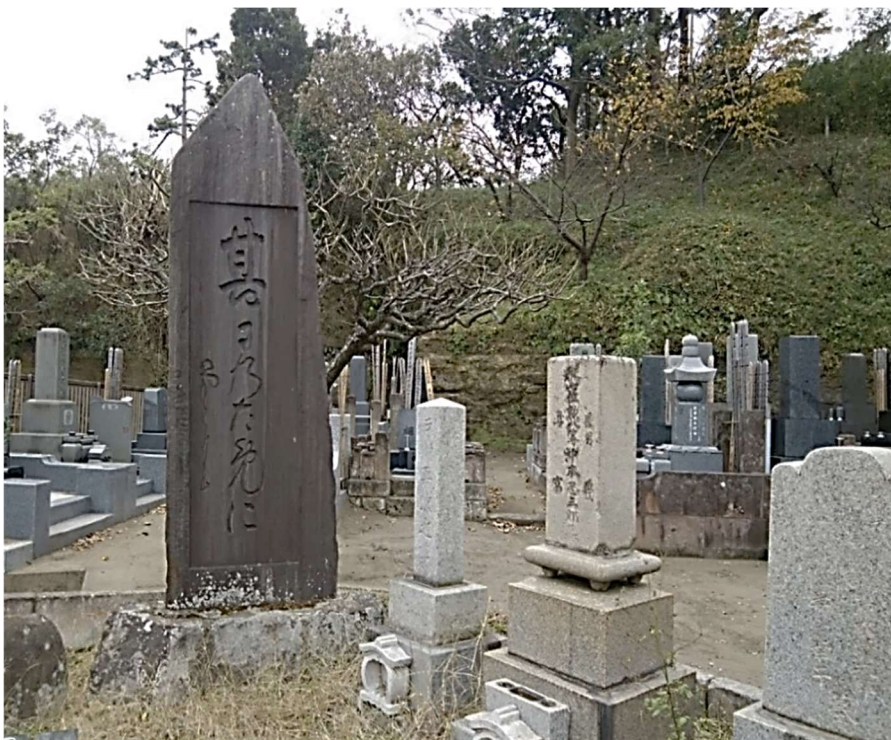
幸子は鎌倉小児保育園の良き理解者で、同園の評議委員を務めていた。保育園の運営資金を得るため地元の婦人たちと共に度々慈善バザーなどで活躍した。

1911(M44)年、同郷の医師牧清太郎と結婚したが、清太郎は1915年11月に没した。清太郎は陸軍一等看護長・勲七等を受けている。この時各所から送られた香典の全額を腰越の青年会、軍人分会、片瀬小学校、腰越小学校、慈善園に寄付した。慈善園は鎌倉小児保育園と思われる。

幸子は明治女学校在学中に受洗しており、鎌倉雪ノ下教会の創設にも関り、1917(T6)年の準備会合に参加した7～8人の中に入っていた。

しかし1923(T12)年の関東大震災で家屋の下敷きになり圧死した。沖本家の墓所は腰越の宝善院にあり、そこには「其日乃

た免に」と刻まれた
頌徳碑がある。その
裏面には幸子の生涯
が記されており「篤
患者敬慕君如慈母乞
診療者陸続不絶」と
ある。これは幸子が



腰越宝善院の沖本家の墓所 頌徳碑「其日乃た免に」

音次郎の意志を受け継ぎ、腰越で地域奉仕の活動をしていた証だろう。

さて、腰越医院はどこにあったのだろうか？

1902(M35)年万朝報の記者、堺枯川が腰越保育園を訪問し、万朝報創立 10 周年記念号に以下の探訪記を載せている。

「・・・藤沢にて汽車を下り、新しき電気鉄道に依って片瀬に至り、片瀬より東の方に進むこと数町、両側の家の門札を見ればモウ腰越と書いてある。…右側にちよいとした門構えがあって、その右の柱には御医者 of 看板が懸って居る。左の柱には小児保育園と云ふ札が懸っている。・・・」。

1913(T2)年の電話番号簿に「一七 沖本幸 腰越津村腰越一〇 医師」とあり、『婦人年鑑 1 大正 9 年版』の婦人団体の「日本女医会」に「沖本幸子 神奈川県鎌倉郡腰越津村一〇」とある。これらのことにより 1930(S5)年の『神奈川県鎌倉郡腰越津村 地番反別入図』と現在の地図を照らし合わせ、地図の場所と推測した。